

いま連帯・協同することの意味

鷲田清一（大阪大学大学院教授）

● 「めいわくかけてありがとう」の意味

協同というのは協同組合というような形ではよくなじまれている言葉ですが、日常生活の中では協同という言葉はめったに使いません。私たちが「協同」という言葉に込められているものをすごく日常的な言葉づかいで考えようとすると、すぐに思い浮かぶのが、「支えあい」「助け合い」あるいは「協同作業」というようなことではないかと思います。

最初に、たぶん皆さんご存知ないだろうと思いますし、私自身もインドの哲学の先生から教えてもらったことなのですが、そこからはじめたいと思います。「ケア」「ケアサービス」という言葉があります。今の時代の私たちにとって日常的な営みをカタカナでしか呼べないというのは、少しさびしいなと思います。「ケア」とか「ケアサービス」という、いろいろな世代、元気な人、身体の不自由な方、いろいろな方が混じって助け合ってずっとやってきた営みを、なぜ「ケア」なんて外

国の言葉でしか表現できないのか、ちょっと気になるところではあります。

けれども逆に「ケア」という言葉を、日本語でピタッとする言葉を探そうとするとないんですね。「お世話をする」「面倒をみる」とか「助ける」というと、ちょっとヘルプという言葉が先に思い浮かびますから、意外とこの言葉は訳すのが難しい。なので、日本語で私たちが馴染んでいる「お世話をする」「面倒をみる」「介助・介護する」といった、いろいろな言葉で呼んでいるものを一言で指したいと、私たちは「ケア」という日本語にない言葉と呼び求めたのかもしれ



ません。

「ケア」というのは、他人にかかわっていく、それも一人ですべてをできない、つまり何らかの他人からの助け、支えがあって初めて出来るような人たちに積極的にかわっていくということです。だから普通は「お世話をする」「お世話をさせていただく」という言い方をします。「お世話」というのは凄くいい言葉ですね。ところがやりすぎると、日本語では面白いことに、「大きなお世話」になってしまい、突然逆の意味になってしまいます。

この「お世話」という言葉ですが、これはインドの言葉(サンスクリット語)で、「セーヴァ」から来ています。そして中国に行くと、日本にたどりついて「お世話」という言葉になりました。それが逆に西向きにヨーロッパのほうへ行ってどういう言葉になっていったかという、「サービス」という言葉になりました。バレーボールなどで「サーブをする」と言いますよね。あれもそうです。「セーヴァ」が「サーブ」になって「サービス」という言葉になりました。だから日本語の「世話」という言葉と、ヨーロッパでいうケアサービスという時の「サービス」というのは、実は語源が同じ一つの言葉から来ているということを教わって仰天したことがあります。「世話」「ケアサービス」を考えると、人々が考えていたことはだいぶ近いところにあったということの一例だと思います。

世話というのは、本当に必要としている人にとって、本当にありがたいことです。人間というのは24時間要介護で死ぬと言いますが、とんでもない。それは半分だけの話

で、人間は、24時間要介護で始まるんですね。24時間要介護というと高齢者のことばかり思い浮かべますが、じつは赤ちゃんこそ完璧な24時間要介護の状態です。生まれてきます。数ヶ月、一年と居るわけですね。お母さんは子どものために一生懸命世話をしますが、子どもが少しずつ自分というものを持ち出して成長してくるにしたがって、お母さんの構え方はだんだん「大きなお世話」に変わっていくのです。

お世話をしていただいた時は、我々は心底感謝して「ありがとう」と言います。ところが、大きなお世話になってくると、非常に迷惑になりますね。ということは、同じ「世話」もある段階まではほんとうに人に涙して感謝されるものでありながら、ある次元を超えてしまうと今度は迷惑へと変わってしまいます。同じ一つの行為がどうして「ありがとう」と言いたいものになったり、「迷惑だ」と言いたいものになってしまったりするのです。これは「ケア」という問題を考えるにあたって、非常に本質的な問題を含んでいます。そのことを少し考えてみたいと思います。

「ありがとう」という言葉と「迷惑」という言葉、普通のお世話をしていただく時には「ありがとう」、大きなお世話の時には「はた迷惑」であると、それぞれ別個のものなのですが、それをいっぺんに言った人がいます。

東京の根岸のほうにある法昌寺というお寺に祀られている「たこ八郎」。かつてジュニアフライ級の日本チャンピオンで、その後、皆からからかわれるようなちょっと悲しいコメディアンをやられていましたが、

40代前半で亡くなりました。その方のかわいらしいお地蔵さんのようなお墓が法昌寺にあります。知る人ぞ知る有名なお寺で、そのお寺の住職は福島泰樹という歌人です。お坊さんで歌人で尚且つボクシングのセコンド、というかコーチをやっている変わり者のお坊さんです。そこにたこ八郎のお地蔵さんがあって、そのお地蔵さんの前にひらがなで「めいわくかけてありがとう」と書いてあります。めいわくかけてありがとう。考えたら変ですよ。めいわくかけてごめんなさい」というのが普通の日本語であります。何かすごく惹かれる言葉ですね。

今朝、朝日新聞で書評委員をやっているものですから、一つ書評を書いてきました。永沢光雄という、AV女優のインタビュー集で有名になった、私の好きなインタビュアーがいるのですが、その方が喉頭がんのどを取られて声が出なくなりました。インタビュアーにとっては本当につらいことですが、その方の闘病記。といっても全然悲壮感がなくて、嬉しいこと悲しいことが声には出ないのに、それに号泣したり大喜びしたりしている躍動する魂が本当によく表れている。

それから朝から焼酎をあおっている患者さん。彼はほとんど毎日病院に来て、精神科と皮膚科と心臓内科と耳鼻科の4つの科をぐるぐる回って、それからがんの先生のところをまわる。大量のお薬も焼酎の水割りであおるように飲んでしまう。それを見ている奥さんは一言たりとも怒りません。普通の奥さんだったら、台所に酒を逆さにして開けてしまうくらいに腹立ててしまうところですが、それもしません。ものすごく面

白いというか、懐の深い奥さん。二人の闘病生活を描いています。その書評の最後に、「この本を読んでたこ八郎の『めいわくかけてありがとう』という言葉がふと思い出した」という文章で終わりにしました。

普通は「めいわくかけてごめんなさい」しか言わないのに、「めいわくかけてありがとう」という、この謎のような言い方は何だろうと。でも一つ分かるのは、普通世話を受けると「ありがとう」なんです。でも、大きなお世話をされると「はた迷惑」「ありがた迷惑」になります。この「ありがた迷惑」という言葉にもあるように、「ありがとう」と「迷惑」というのは、一見正反対のものでありながらどこかつながるところがある。では、この「迷惑かけて」と「ありがとう」の間に、私たちはどういう言葉やどういう思いを間に埋めれば、「迷惑かけてありがとう」という言葉が心の中にすんなり入っていくのだろうか。

「迷惑かけてありがとう」という言葉と同じくらい好きな言葉をおっしゃった、あるいは文章で書かれた方がもう一人いらっしゃいます。この方は小さい時から難病にかかられていて、東京都で重度障害者としては初めて都立の養護学校の専任教員になられた、遠藤滋さんという方です。この方が着任されてから15年くらいたって、身体の障害がだんだん重くなって、結局24時間要介護の状態になりました。やむなく都立の学校を退職せざるをえなくなりました。24時間要介護とは具体的にどういう状態かというと、言葉がほとんど明瞭には話せない。身体、足、腕などをたえずマッサージして動かしていないと、まったく動かなくなって

しまう状態。もちろん、食べるものも非常に細かく誰かにやってもらわないといけない。つまり24時間たえず誰かのお世話にならないと命すら危ういという状態になったわけですね。

ところが彼はそれでも先生であり続けようとうしました。本当に無茶苦茶ですが、それまでお母さんと一緒に暮らしていらっしやいましたが、24時間要介護の状態になったのをきっかけに、逆に親と別居するようになりました。その後、1日8時間交代でボランティアの人に世話をしてもらうようになりました。世話をする方は時給600円のアルバイトで、一人たりともケアのプロはいませんでした。全員ケアなんてしたことがない10代から30代の人たちでした。

大学時代の友人で伊勢真一さんというドキュメンタリーの映画監督がいらっしやいますが、その介護の様子を、その方がひらがなで「えんとこ」(遠藤の家の意味)と表現しました。このかけ言葉で互いに見ず知らずの、のべ1,000人の若者が遠藤さんを「縁」にしてつながった。そういう縁のある場所という意味も含めて「えんとこ」と言っています。確か昨年夏も中野の駅のそばにある映画館で1週間ぶっ続けでロングランで上映されました。監督も観客の入り気になって毎日見に行っていたようですが、ある日とうとう観客がゼロの日があった。監督だけが自分の作品を見る。もちろん、封切りの映画館ではぜんぜんやられなくて、各県でそれぞれ有志の方が実行委員会をつくって上映されています。私も何回も見ました。

この映画は、映像自体も面白いのですが、

一番衝撃的だったのは、本当にお金のないロッカーで、すごく長い髪で刺青などをたくさんしている薄汚い男です。それもカメラが追っていくと、家は河原でのテント生活。稼ぎがないので貧乏状態なのですが、楽器などを買わないといけないから、その子が遠藤さんに一生懸命足をマッサージしてみたりします。

他のアルバイトの女子高校生なんかは吹奏楽団でトランペットをやっているらしくて、遠藤さんの横でお食事をあげたりしながら、空いた時間には一生懸命トランペットを磨いている。遠藤さんはなかなかしゃべれないのですが、聞いてくれるので、いろいろなことを相談したり、ぼつりぼつりと今日あったことを話したり。お正月はみんな郷里へ帰るので、中国からの留学生の人たちがお世話をしているところを映した映画です。

同時に映画を上映する時に「えんとこ」という冊子も販売していました。その冊子には「今日はこんなことがあった、こんな様子だった」と記されたノートが起こされています。8時間交代でボランティアの人たちがケアをするわけですが、看護師さんと同じで引継ぎが大事なんですね。それが映画と同じくらい面白いんです。

何が面白いかというと、みんなアマチュアですから、ケアのどうこうとか体の変化がどうのというのはわからない。むしろ遠藤さんと話したこととか今日の8時間の感想とかが書いてあります。遠藤さんは24時間要介護ですから、これしてくれ・あれしてくれと言うだけです。違うというのものはっきりは言葉でわからない。ものすごくそれ

をわがままになさるんですね。それでスタッフが頭にきて遠藤さんに憎々しい恨みの言葉を言っていたりしているところが面白い。遠藤さんも書きますが、書くと言ってもなかなか書けません。彼はワープロを打てる体勢になるまでに1時間以上準備運動がいるらしく、それから指一本でかろうじて短い書き物をされます。その中でびっくりしたのは、先ほどのたこ八郎ではないですが、「人に迷惑をかけること、それは大いに必要なことである」という文章が出ています。はああ、よく似たことを言うものだなと思いました。迷惑はかけないほうがいいと思ったら、迷惑をかけることが大事だと書いてある。

同時に、もう一つこの冊子で感心したのは、二人の若い女性は何ヶ月も介助したあとの感想として、正反対の感想を書いていることです。これが私にとってはいろいろなヒントになりました。一人の子は「たぶん、同じことを友だちに話していたらすごく軽くとられることでも遠藤さんなら一生懸命聞いてくれるし、本気で答えてくれるし、それが嬉しかったんだと思います」と。ところがもう一人の女性は、「あなたが言語障害をもっていて良かったと思う。一言一言を聞き漏らすまいと耳を傾けることができるから。あなたが生まれてきて良かった」と正反対です。前者の女性は自分は人生でこんなにていねいに聞いてもらったことがない。普通だったら絶対「しょうもない事」と解釈されてしまうようなことでも一生懸命聞いてくれたのは初めてだという感想です。後者の人はそれと正反対で、人の話をこんなに必死で聞いたことがないという喜び

です。遠藤さんの出す音を一つ一つ必死で聞かないとならない。こんなに一生懸命人の話を聞いたのは初めてだと。この回答はいったい何なのか。

2つの感想を述べた若い世代というのは、ある種あんまり相手にかかわりすぎるといふことをしないようにセーブしていますね。深く関わってしまうと必ず関係が軋んでしまう。傷を負ってしまう。だから互いに傷つけあうような関係に入る前にすっと一歩退いてサラッとした関係にしておこうという、そういう深く関わることへのためらい、もっとディープに人と関わっていいのと思うようなところで、すっと身を退いてしまうようなところがあります。だからでしょう。たぶん、ここまで自分の思いをつまらないことも含めて他人が全部受け止めてくれた。あるいは逆に、適当に「そうね」とか言われるところを、ここまで必死に聞こうと他人に感心をもった。そういうことにお二人ともたぶんびっくりしているんだろうと思います。

一方は聞いてもらえた、他方は聞くことができた。聞いてもらう時には、自分をかなり無防備にしてしまう。普段なら「きっとこんなことはバカにされる」と思って言わないようなことまで人に言ってしまった。あるいは聞くことができた。普通なら簡単に言葉を濁しているようなところでも一つ一つ、「それ、どういう意味？」とはっきりとその人の言いたいことをつかもうとした。つまり、聞いてもらえたにしても聞くことができたにしても、普段とは全然違う深いかかわりの中に身を投げたと言えると思います。そしてそんなことができたのは、たぶ

ん目の前に遠藤さんという、自分の弱さを100パーセント無防備にさらさずには生きていけない人を前にしたからだと思います。

ちょっとこれは解釈になりますが、我々は24時間要介護というものを人に見せたくないもの。みんな本当は自分の中にいっぱい抱え込んでいるんですね。ところが僕らが生きるというのはそれを押し殺すということです。それを我々は「がんばる」という言葉で呼んできました。弱いものを抱え込んでいても「こんなことでくじけてはいけない」と弱いところを抑え込んで、隠して、自分に対しても隠して、「もっとしっかりしなくてはいけない」「がんばろう」と自分を奮い立たせてみんな生きてきたわけですね。だから今いらっしゃるわけですが、そういう人が24時間自分をフルに無防備に弱さをさらけ出して、それでも生きようとしている。

遠藤さんの場合、教育を100パーセント他人にしてもらいながらそのことで若い人を教育しようという、ものすごくポジティブな行為をしていらっしゃる。そういう姿を見てたぶんこの若い二人は、自分が今まで押し殺すという形で、つまり「がんばる」という形で押さえつけてきた自分の弱さというものに、もう一度気づかされて、そして自分の中の弱さというものに「がんばる」「乗り越える」という形ではなく、おそらく遠藤さんの前ではそれに「正面からもっと素直に向き合う」ということができたのだらうと思います。それが遠藤さんに対して、自分の失敗したこと、悩んでいること、悲しんでいることなど、人には今までとっとも言えなかったこと、押し殺すしかなかったこと、

親にも言えなかったことが、遠藤さんには言えたということだと思います。

そこで、少し見えてきました。たこ八郎が「迷惑かけてありがとう」と言ったこと、あるいは遠藤さんが「人に迷惑をかけること、それは大いに必要なことである」ということは、それがたとえ迷惑という形であれ、人ともっと深く関わっていいんだ、傷つくことも含めて、人との関係を避けようとするのではなくて、迷惑をかけると借りもたくさんできますが、他人への借りなんかもっともっと引き受けたらいいんだ。そのことが生きるということの非常に大きな意味を形づくっているんだということなのではないか、ということがまず今の段階で見えてきます。

●あらゆる世代が「高齢者の傷」を受けようになった現代社会

どうして私たちはこの時代に傷つくことをかつて以上に回避しよう、そういう関係を作らないでおこうと思うようになってきたのか。小学校の運動会が典型的ですが、運動会で競争をすると絶対勝者と敗者ができますから、負けた子が傷つく。だったら1位・2位・3位を決めないでおきましょうとか、競争をすると負けた人は傷つくから競争という機会をなくしましょう、というふうになります。

これまでの社会は逆に傷つけること、傷つくことのチャンスをわざとつくっていく、それが教育だったわけです。分かりやすい例では、高校野球ですね。スポーツを学校の中に取り入れることの一歩の意味は、勝つ

ためにがんばることではなくて、負けることを経験することにあります。全国に高校の野球部は1万ほどあると言われています。それで負けないのは1チームだけなんです。どんなに強いチームもトーナメント戦をやれば、県大会で1位になっても甲子園で1回戦か2回戦か3回戦か準決勝か決勝で負けるわけです。つまりスポーツの真理は、1万チームあれば99.99パーセントは必ず負けるということです。とくに勝ち続けた強いチームほど負けの意味がキツイですね。今一步のところで負けたということ。つまり普遍性から言ったら、勝つことより負けることのほうがはるかに多いですから、負けることを経験させる教育としてスポーツは導入されているわけです。

そして負けることの意味というのは、常敗チームでは悔しさも薄れるかもしれませんが、強いチームほど負けることの意味が強烈なんです。でも負けるということで、自分よりも弱いチームの負け続けているその「負けること」の意味というのを、強いチームの人ほど逆に深くかみしめざるをえない。強い人ほど弱さに敏感にならざるをえない。つまり負けることで傷つき、そんなことでオタオタしてしまう。崩れてしまう。弱さへの配慮は負けた者しか分からない。だからどんな強いチームにも必ず負けさせるという仕組みができていて、あれがトーナメントです。だからスポーツというのは、負けることの体験が一番普遍的な経験ということが言えます。もちろん、1チームだけ最後まで負けないチームがありますが、めったに二連覇というのはないですから、また翌年負けるわけですね。

これまでの教育は、そういう挫折とか敗北とかを経験させることでもっとみんなを強くする、それからみんなもっと深いいたわりの心を持てる人を育てるというようにやってきたはずなのですが、どうしてか今は学校でもとにかく負けさせない、負けると傷つくから傷つかないように競争はさせない、というほうに教育が移っていていますよね。

それから友だち同士のつきあいもそうです。相手と自分が互いに傷つけあわないような関係、ということにものすごく注意を払うようになってきました。それがどうしてかということ、ここに時代の影というのが明瞭に見てとれるように思います。

現代社会を見た時に、本来なら高齢者の方が受けるダメージとか傷というものを、あらゆる世代、とりわけ若い世代が、大人になる前から深く受けやすい、そんな時代になっている気がします。「自分がまだここに居ていいのか」と思わないで歳をとれる人は、ごく少数です。たいていの高齢者は、年老いていくということは他人に迷惑をかけるが増えていくことだと感じています。

なぜかということ、歳をとればだんだん自分ひとりで出来ることが減っていく、あるいは装置をつけないと出来ないことが増えていく。そうすると、私たちは高齢になるとだんだん気持ちがいろいろな負担を抱え込みます。本当に長生きしていいんだろうか？むしろこの先は短いほうが周りの人にとってはいいのではないか？自分のことを孫たち、娘たち、息子たちは大事にしてくれていて、その気持ちは疑われないけれども、自分が今日誰の手も煩わすことなくぼっくり

死ねたら、それはそれで本当は子どもも孫もすごく楽になるのではないかとそちらの方向でばっかり考えることが増えてくると思います。そのような意識のほうが先に死のそばにまで行ってしまうということが出てきます。

実は同じことが、50歳を迎える直前の男性にも言えます。1997年頃からです。殺人で検挙される圧倒的1位は46歳から49歳の間なんです。面白ことに、96年までは28歳が1位でした。97年からベスト3、というよりもワースト3ですが、それを40代後半で占めています。これはものすごく不思議な現象で、昭和20何年かに石川達三の『48歳の抵抗』という小説がありました。今でいう不倫小説のはしりみみたいなもので、「抵抗族」という言葉も流行語で生まれました。あの男も48歳。ですから、寿命が15年か20年伸びたのに中年男性の危ない時期というのは今も変わっていません。

どうして97年ごろからかというのが不思議で、多くの方は「団塊の世代がその年になったからだ」とよく言うのですが、そんな理屈は絶対にありません。団塊の世代が30歳の時には30歳が一番殺人検挙率が高くないとおかしいのですが、そうはなっていません。ということは、やはり50歳を迎えるということが男性をかなり動揺させる一つの数字だと思います。殺人で検挙されるのは圧倒的に男性なんです。50歳を迎えると、いくら長生きしても後半戦ということを意識させられます。あと数年で退職ということもあります。

女性の場合にも昔から更年期障害とか言いますが、更年期とはクリティカルピリオ

ド、危ない時期という、あるいは天下分け目、人生の別れ道という時期のことを言います。本当は女性だけではなく思春期も更年期ですね。男の50歳前もきっと更年期だと思います。女性の場合にも身体ホルモンのバランスが大きく変わるといってもありますし、それから子どもが高校や大学を卒業して家から出て行く時期、つまり自分がその人のためにあると思っていたその人がいなくなるということで、一体自分は何のために何をしていたらいいのかが急に見えにくくなる。たいていの場合、最近は大学ぐらいまで子どもは家に居ますから、ちょうど子どもが出ていくのと交代に自分あるいはパートナーのご両親が介護に入ってくる。そして余計に更年期のしんどさがつのってきています。

もっと悲しいのは10代の人たちで、10代の方は先ほどの高齢者がつい抱いてしまう「問い」というものを、大人になる前からはらんでいると言っているのではないかと考えています。というのは、歳をとると「もうこれもできなくなった」ということが増えていきますよね。

それから更年期の人とか50歳前の男性というのは、その頃、人生の前半生を振り返って「大学を卒業した頃には、こんな職業人になろうと夢いっぱいだったのにできなかったなあ」「幼稚園の時には電車の運転手かバスの運転手さんになろうと思っていたのに、それも結局一度もやらずに終わったなあ」と自分が人生のいろいろな段階で「おれはこんなことを目指すんだ」「ああこれも結局はしなかった、できなかった」というように最初から断念のほうが生まれていることが

あるように思います。

すごく分かりやすいのは、彼らのご両親あるいはおじいさん・おばあさんの世代というのは、生きるということが前の世代を乗り越えることでした。僕も団塊の世代の一人ですが、栄養が良くなっているので父より身体が10センチくらい大きい。父親は小学校しか出ていませんから、学歴もはるかにいい。子どもの時から僕らの世代は自分の部屋が持てました。それから戦後生まれの中学生くらいからお小遣いというのを持っていて、自分で自分のシャツや雑誌を買う。それまでは小遣いなんてありませんでした。むしろ働かないといけない社会でした。このように、親を乗り越えるということが成長することだというイメージがものすごく染み付いています。またいろいろ初めてのことがあります。今までなかったアートの領域を開発したとか、音楽なら、戦後生まれの世代が初めて音楽というのは座って黙って聞くものではなくて、立って演奏して暴れながら声出して聴いてもいいんだと。また音楽は静かな場所だけではなくて、野外でやってもいいんだということも初めて経験しました。また、プロという訓練した人たちがやるだけでなく、今の高校生のようにすぐにバンドを組む。歌というのは与えてもらうのではなくて、自分たちで歌詞も曲もメロディも作って、ついでに演奏も自分たちです。音楽一つをとってもそういう新しいことがたくさんありました。

女性の場合でも、NHKの朝ドラにもありましたが、女性で初めて建築士になった人とか初めてダンプの運転士になった人と

か、初めてというのが人生の中であって、「自分が最初にやるんだ」というチャレンジできるチャンスが戦後社会にはいっぱいありました。

しかし今の10代の方は、学歴で親を越すというのは無理でしょう。うまくいって親と同じ学歴というケースが多い。大卒くらい。それから小遣いはひょっとしたら今の子どもの親だったら戦後生まれだから少ないかもしれない。部屋は一つも増えていない。子ども部屋を二つ持っている子もいない。これも一緒です。バイク乗っている。そんなのは親の世代でも乗っていた。背もそんなに変わりません。

このように考えていくと、自慢できることと言えば、足がちょっと長くなったことくらい。あとはがんばっても親程度。乗り越えるというイメージは全然ないし、それからどういう職業に就いたら何歳で給料がいくらくらいになって、いつ頃窓際にやられて、いつ頃退職して、その後、濡れ落ち葉になるか趣味に生きるかとか全部見ているわけですね。そうするともう銀行員とか言われても、子どもの時に着地点からゴールまでがイメージとしてサーっと浮かんでくるわけですね。

特に決定的なのは、自分にしかできないことというのはもう何もないということなんです。その背景には逆に、自分にしかできないことをしたいという気持ちがものすごく募ってきているということがあります。例えば僕が就職相談を受けに行くと、「私はどんな仕事が向いていますか？」「私にはどんな素質があるんでしょうか？」と毎年学生が聞きにきます。僕は必ずそれを笑い飛

ばす、あるいは突っぱねることにします。「そんなものあるはずがない」と言うんです。

会社に入るということは、最初は誰にでもできる仕事しかさせてもらえないということなんです。例えば、関西なら阪急電鉄に入っても、今はもうないですが、最初は切符切りから始まって「電車来ます」というのから事務まで、ありとあらゆる仕事をさせられます。つまり会社に入っても、何の実力もない人に大事なことは任せられないので、誰にもできることしかやらせてもらえません。誰にでもできることをただただ繰り返しているうちに、「あっこれはあいつにしかできないやり方だ」というようなことを自分も感じ、そして他人もそれを認めてくれた時に初めて自分にしかできない仕事が入るわけです。

だから最初から「私にしかできないことって何でしょう。どんな才能や素質があるんでしょうか」と言われても、ちょっとシラケてしまいますよね。それでちょっと冷たく突っ放すのですが、私にしかできないということを強く求めるようになってきています。これはいったいなぜなのでしょうか。

●個人の自由を追い求めた近代社会の弊害

①自己責任でつくり上げる人生

私はこれにはものすごく大きな時代的な問題があると思います。私たちは自由な社会、一人一人個人が自由になれる社会を求めて近代化というものを行いました。そのことの裏返しで、「自分だけにできること

て何だろう」という個人の深い不安と一体になっている。そういう社会を私たちは近代化ということをつくってきたんだろうと思います。

要するに、社会を近代化するということにはいろいろな定義の仕方がありますが、一番分かりやすいのは、一人一人が自分の人生を選ぶことができる社会ということです。それまでの社会は、「こういう職業の家に生まれたらその家の跡を継ぐ」とか、「こういう階級に生まれたら、その階級で一生暮らす」とか、「こういう地域に生まれたら、この地域の中で、家族ではない薄い親戚かもう少し他人の人と結婚して家庭をもつ」、あるいは、「男に生まれたらこういうことができる、女に生まれたらこういうことをすることになっている」など、自分の責任ではなくて、生まれたその場所、家、その状況によって、その後の自分の人生も全部枠組まれている、そういう社会が前近代的な社会だったわけですね。生まれたら大体人生の形が分かっている。時々ドロップアウトしたり、アウトローになったり、でも、基本的にはほとんど決まっている社会でした。

それに対して近代社会は、生まれた時に自分が背負っている、親の職業、財産、階級、性、いわゆる出自というもの、これらは自分のせいではなく生まれた時に背負わざるをえないものなので、そういう差を全部なしにしましょう、つまりその人が生まれてきた時の出自とか社会的コンテクスト(文脈)を全部チャラにしてカッコに入れて、スタートは全部一緒にしましょうという社会に変えようと思いました。だから例えば、近代社会になって初めてできたものに選挙制度

があります。

選挙は今の社会では「普通選挙」と言いまし、男も女も1票、高齢者も二十歳の人も1票、総理大臣も無職の人も1票なんです。これはベンサムと言う人の言葉ですが、普通選挙というのは、この社会に居る人を全員「1」と考えて、1以上にも1以下にも数えない、そ



う社会を目指してきました。しかし、これもすぐにはできませんでした。百数十年かかりました。最初は限定選挙と言いまして、高額納税者のみとか、元貴族階級のみとか、男性のみとか、いろいろな条件がついた制限選挙 (Limited) でした。歴史を見たらまず Limited があって、それに対して一つずつ Limited (限定) を外していった「普通選挙」が実現してきました。

時間はかかりましたが、今は男も女も、どんな階級であれ、どんな納税額でも全部「1」という社会を実現しています。教育もそうですね。昔はお金持ちの人、あるいは上層階級の人たちだけが特別な教育を受けていました。「普通教育」は明治時代にできました。この「普通」も輝いていました。例えば6歳なら6歳で、日本中にいる子どもは6歳になったら、親がどんな職業であれ階級であれ関係なく、全部学校に入れる。そして同じスタートラインに立って勉強を始める。抜け駆けもだめ。1年間でこれだけをやる。みんな一緒に同じラインでスタートするとい

う社会を目指しました。

これはけっこう自由で嬉しい、本当に開放感に満ちた制度だったわけですね。貧しくても学校で同じ教育をみんなと受けられるわけですから。そうするとスタートはいいのですが、そのあとがしんどい社会になるんですね。つまり自分がどういう人間になるか。どういう収入を得るか。どういう人から尊敬を得られるような人になるか。どういう名声を得るか。スタートラインは一緒にハンディをつけないでスタートしたわけですから、その後の人生は自分の責任になるわけです。前近代的な社会では、その後の自分の人生はどういうものか、それはあらかじめ自分の責任とは関係なしに枠組まれている。でも、近代社会では自分でそれを選びつくっていく社会になったわけですから、自分が誰かということに関しては、自分が責任を持つしかない社会でもあるのです。それでみんな「がんばれ」「もっと勤勉に」「暇があったら前進せよ」という価値観が私たち一人一人の中に浸透していく。こ

れは自分がここにいるというその存在の理由を自分ではっきりさせなくてはならない社会。自分は誰か、自分はここに居てよいのかという、その存在する理由とか価値を自分で作り、証明しなくてはならない社会です。

いわゆる最近言われる「勝ち組」「負け組」は大嫌いな言葉です。僕は「勝ち負け」というのは好きな言葉なんですけど、「組」になるのがいやらしい。なんでつるまないといけないのか。負けるとつるむというのは、まだ束になると力になるかもしれないと思うから分かりますが、勝つものがつるむというのは私にはぜんぜん分からない感覚で、あの言葉は嫌いですが、一応言葉を借りると、「弱者」という言葉も私は嫌いですが、「負け組」とか「弱者」、これも理念の上では基本的に自分の責任になるわけです。頑張りが足りなかったとか、せっかくの同じチャンスがあるのにそれをうまく活かせなかったとか。だからといって、近代の社会は先ほど言った原理がありますから、みんな「1」として考えて1以上にも1以下にも考えない。だから強い者、弱い者、収入が多い者、少ない者があった時に、それをできるだけみんな1として同じようになるように再配分する。それが税金の再配分ということであったり福祉政策であったりするわけです。

そうすると福祉政策というのは、保護されねばならないものが出来てきて、それを社会全体で手当てをする施策だということになっていきます。つまり、弱い人は何か遠慮して生きていかななくてはならない人、つまり社会から養ってもらおう人というネガティブなイメージがどんどん強くなってい

くわけです。

私はみなさんを驚かすわけではないですが、きんさん・ぎんさんは、社会的には成功されたし、個人的なイメージとしては僕もああいう人がそばにいると明るくていいなあと思うのですが、実はあの人は弱者の代表だと思っています。つまり、個人的にどうこうということではなしに、ああいう可愛いおじいさん・おばあさん、素直なおじいさん・おばあさんがみんなに拍手をされて、ついでにあの人たちの場合にはお金も稼いでくれますからね、家族にとってはものすごくいいわけですよ。素直でやりやすい。家族にとって、「こうでないとお後はしんどいよ」というメッセージなんですね。だからみんなあんなふうに可愛い、素直なおじいさん・おばあさんになりなさいというメッセージを明らかに私たちに暗黙の間に伝えているわけです。自分たちを養ってくれる次の世代の言うことを聞かないといけない。彼らにかわいがってもらえるような存在にならないと幸福な老後はないよ、という脅しとも取れます。個人的にはあの人たちは成功されたかもしれませんが、そういう意味ではきんさん・ぎんさんは弱者としての高齢者の代表であると思います。

お年寄りが可愛いはずはないと思うんです。素直であるはずがない。だってどの世代を見ても、ここにいる人だって意地悪な人もきっといるでしょうし、意地っ張りな人もいるでしょうし、人の揚げ足を取る人もいるでしょうし、どす黒い人もいるでしょうし、素直な人もいるでしょう。人間っているいろんなんです。いろんな性格の人がいるのみならず、例えば認知症などで記憶の一

部がだんだん欠落してくると自分の責任も自分で取れなくなってくると気持ちが焦りますよね。なんか自分の知らないことで家族が自分に文句を言っている。そこで辻褄あわせをしたり、プライドもありますから、逆に物がなくなったら「私のせいじゃなしにアンタが盗んだからよ」という、ものすごい合理的な思考を始めるわけです。だから人柄が悪くなくても、やはり歳をとると素直になるのは難しいですよ。でも、そうでないと大事にしてもらえないよ、というメッセージとしか私には思えません。

さて、そこで近代化ということは、一人一人の個人を自由にする社会で、そういうものを目指したと述べましたが、それは同時に一つ皮をめぐってみると、自分が誰かを自分で証明しないとならない。自分には存在価値があるんだということを自分で確信を持ってないと生きていけない社会。言い換えると高齢者のように、「自分はまだここに居ていいのか、本当は居ないほうがいいのか」という思いですね。人に迷惑ばかりをかけて自分は何もしてあげられないということが増えてくると、そういう心の負担というのは特別なことではなく、社会で個人の自由が進めば進むほどつづいてくるといことです。

②資格で選別される社会

その背景にあるのが、近代化と共に特に20世紀に一気に加速した資格社会、資格で人を選別する社会です。これは戦後の社会のものすごく大きな特徴です。若い人が「私の素質ってなんでしょ」とつい聞いてしまうのは、もちろん、彼らも自分の存在理由

を確認したいからというのもあるのですが、社会のほうが、つまり企業とか役所のほうが「あなたは何かできますか?」と聞いてくる。何ができるかと求めてくる。それで人を選別していく。そういう社会だからです。

会社の就職の面接でも役所の公務員の面接でもそうです。試験をしてあるいは面接をしてこの人は使えるかどうか、将来業績をあげるかどうかをチェックする。大学でも入学試験をしますが、近代社会というのはそういう試験で成り立っている社会です。会社に入っても昇格試験があります。その試験は何かというと、「この人にはこういう仕事をさせられるかどうか」、つまりこの人にはこの仕事をする資格があるかどうかを問う、そういう試験だらけの社会なんですね。この試験による選別はものすごく残酷な制度です。この社会では自分は誰かを自分で証明しなければなりません。自分はこれはできる、これもできる。あるいはもう少し突っ込んで、他の人にはできないこんなことができる。他の人が持っていないこんなものを持っているということを競争する社会ですよ。

選ぶ側は選ぶ側で、この人はこれとこれとこれができる、あるいはこんな素質があるとチェックして行って選別するわけです。選別というのは選ばれた人は「どうぞ」、選ばれていない人は「あなたたちは不要です」と、あからさまに言えばそういうことが、入学試験とか昇格試験とか就職試験で絶えず起こります。そういう意味で人間がいつも条件つきでしか肯定してもらえない社会、承認してもらえない社会です。子どもが宿題をしなかったり、勉強をしない時に、よく

お父さん・お母さんが「もし、日までにこれができたらディズニーランドに連れて行ってあげるからね」と言ってお尻をたたきますね。それと同じことを我々全員がこの社会の中ではさせられてきたわけです。

しかし、これができる、これができないというのも、主観的なものでは駄目なんです。社会のほうが決めていきます。試験をするとか、通信の免許があるとか、介護士の免許があるとか、そういうふうにはたくさん資格を問うていくわけです。例えば「コンビニで高校時代から慣れているレジ打ちは人に負けない」とか、「愛想を言わせたら人に絶対負けない」とか、「人の車を一発でガレージにピシッと片付けられる」とか、こういったこともものすごく大事なことで、本当に一生懸命やっている中で身につけるものですが、全然できたことに数えてもらえません。その人が本来、スーパーでレジ打ちをしている時、「私の列が一番早く流れる」というのはものすごい自慢で「やったー！」と思うのに、社会ではそんなものは認めてもらえません。「何ができることが本当の実力か」というのは社会のほうが決めています。そういう意味では、自分のプライドもそこでバツサリ切られてしまいます。

③公共サービスの代行と個人の無能力化

もちろん、こういう資格社会が一気に進んだのは、単に社会が情報とか知識というもので構成されている（最近はその知識基盤社会＝知識がないと職業につけない、社会は知識で動いている、と言う）という考え方が中心になってきたことでもあります。もう一つ、どうしてみんな資格、資格と言う

ようになったのか。その理由の一つに、福祉があげられます。なぜ福祉と資格社会が深くかかわっているかということ、近代社会のさらに別の特徴でもあります。近代社会というのは生老病死、つまり人間が生きていく上で、命に訪れるいろいろな出来事 - 生まれること、死ぬこと、老いること、病むこと - それまでは全部家族でやっていたそういう世話を、社会が福祉という名前でサービスとして代行するようになった社会、そういう社会を近代社会は目指してきたわけです。

例えば、保育、炊事、洗濯、排泄物処理、病人の看護・介護、子どもの教育、冠婚葬祭。こんなの全部、昔は家でやっていました。私の家族は家で死にましたし、出産も親戚の者は家でやっていましたし、排泄物処理も近くの農村の方が週に何回か来てくれて持って行ってくれました。あれも大事な経験だったんですね。

近代社会になるということは、それらを公共的なサービス機構が代行するようになったということです。保育は保育園がするようになった。教育は親が教えなくても学校がちゃんと教えてくれます。炊事はスーパーができて、材料は自分でいちいち買いに行かなくてもスーパーに行けば何でもある。あるいはレンジでチンすればすぐ食べられる。あるいはレストランがある、ファーストフードショップがある。自分で調理をしなくてもあるいは買い付けしなくても食べられるようになった。食のかなりの部分を公共的なサービスでまかなわれる。洗濯も自分でしない。本当は人間の汗とか体から出てきた体液とかみんな臭いで知っ

ていたのに、今は放っておいたらクリーニング屋がやってくれる。病気になっても、昔はめったに病院なんかに行きません。熱が出たらどの葉っぱを煎じて飲んだらいいとか、虫歯の時にどんな葉っぱを詰めたらいいかということ、たいていの病気を家で何とか知恵で対処したものです。今は無能力で、全部専門家である病院のお医者さんに任せる。むしろわれわれが素人判断してはいけない、と戒められる。介護も介護施設に任せる。出産も病院も任せる。死も病院に任せる。葬式は東京ではどうなのか分かりませんが、関西では公益社に任せる。

つまり、これらは生老病死、人間の命に関わることです。だから絶対にミスがあってはいけない。人の命に関わることだからということで、消防署や警察署と同じで、非常に厳しい資格やトレーニングが、このサービス業を担うために課されます。そういう資格社会の中で、私たちの生老病死、つまりお互いの命の世話というのが、公共的なサービスに代行されるようになることで私たちは一見楽になり、快適になりました。そんな中で、一番私たちがよくよく考えないといけない大切なことは、それと同じだけ個人一人一人が無能力になっていったということです。

つまり、昔は協同する力というものを持っていたんです。近代社会というのはそういう協同の力をシステムの力として、公共的な社会の福祉の制度とかシステムとかといった、公共的な機関が代行することになってきたことで、私たち一人一人は快適になったけれども、みんなと一緒に何かをする能力というのはどんどん、公共的な

サービスのほうに吸い上げられて、家族の力、地域の力、協同の力というのを私たちはどんどん、そぎ落としていったわけです。そしてみんな個人としてはすごくナーバスになって、「自分は今だここに居ていいのかしら」「他の人にできない何かってないのかしら」とそんなことをぎりぎり、自分に対して問い詰める社会、あるいは他人に対しても問う社会になりました。

だから、私たちは病気になったら、昔であれば家族に聞いて対処したそんな知恵は全くなり、今の知恵はどこかおかしかったらすぐ病院に行くこと。しかも資格を持ったプロの判断に従順に従うこと。それが一番確かな道なんだと。ワインが飲みたければプロに聞くこと。「自分の味を信じてはいけない」というか「そんな能力はお前にはないんだ」と。ソムリエが推薦するものが一番うまいんだと。ものすごくプロに従順になっています。ましてや、プロフェッショナルの人たちは自分たちの存在理由を明確にするためにますます細分化されて、そして専門用語で語るからますます私たちは分からなくなります。

インフォームド・コンセントも通常はまったく機能していないですね。ぼくもインフォームド・コンセントを昔、手術した時に受けましたし、最近では歯医者さんでもインフォームド・コンセントをしてもらえますが、ものすごい早口だし、専門用語をうわーっと言われるし、ゆっくり話して下さっても知らないことばかりだから判断できないですね。正直なところ、インフォームド・コンセントというのは、受ける側からすると相手のお医者さんが信用できるかどうか

か、いい人かいい人でないのかを必死で顔とか態度で探って、その上で素直に先生に全部任せてしまう。ものすごく従順になっています。

だから、今自立とか自己責任とか簡単に言うけれども、本当は自分の力で生きるとか自覚するなんてことは誰もできないのです。お金でいろいろなサービスを買うことはできます。しかし関西で大震災があった時に一番分かったのは、お金があってもどうしようもない、実力が必要だということです。例えば飲み物がない時に、どの水だったら飲めるかとか、あるいは水を消毒するのに沸かさないといけません、ライターがない時にどうやってどこで火をおこすか、明かりがない時にはどうするかとか、ものすごく生活の基本的な能力、その必要性が露出しました。僕らがそれをそっくり失っているということに気づかされたのがあの震災の時でした。

だから私たちは自立しているとかと言いますが、実はみんな一人では生きていけません。社会のシステムにぶら下がり、お金でそのシステムのサービスを買うことでかろうじて生きられているのが私たちの社会です。専門の人たちがたくさん出てくる中でそういう人たちに全部委託しますから、ますます一人でできることが減っていく。無能力にどんどんなっているというのが私たちの社会です。

●協同することの意味

私たちの社会にはいろいろな法の制度とか社会の制度とかありますけれども、基本

的に理想的な個人、つまり自分の人生を自分で設計し、自分がやったことには自分できちっと責任をとり（自己責任）、自分で自分の存在に責任が取れる強い主体、強い人間というものを前提にしてつくられているのです。裁判の時にはとくにそれが出てくるわけですね。ところが、実際に私たちは自分のことを自分で決められるような、あるいは責任が取れるような強い人間ではないし、自分の面倒すら一人ではみられない。これが普通の人間のあり方です。私たちの社会はそういう社会の法制度、強い主体というものを前提にした法制度であるにもかかわらず、実際には人間というのはものすごく弱い、簡単に壊れてしまう無能力な存在にますますなっている。その間の隔たりがすごく大きくなっているというのが現代社会だと思います。

最後に一つ心に留めていただきたいのは、人間というのは自分が弱いことを知っている人のほうが、自分が弱いと思っていない人よりも強いということ。私の大好きなパスカルの言葉では、「人間の弱さはそれを知っている人たちよりはそれを知らない人たちにおいてずっとよく現れている」と。

例えば私の友だちにもそろそろ定年の者がいますが、見ていて本当にパスカルの言葉が分かるのは、現役時代にバリバリやっていた人ほど本当に定年になった時に危ない。何となく50歳を過ぎるとそういう人は貧相にみえる。これは根拠がないかもしれませんが、1本のアイデンティティでやってきた人は何か50歳を過ぎると貧相に見える。若い時に学校ではあまり活躍しなかったけれども放課後に活躍した人、そし

て自分の力でグループを組織して、オートバイ系の仲間がいたり、バンド系の友だちがいたり、釣り系の友だちがいたり、いくつも交友関係があって、自分とは誰かという自分の存在証明をしなくても2つや3つくらいあるという人のほうが、学校の成績が悪かったとしてもかえってデンとしています。一筋でやってきた人のほうがかえって貧相に見えます。

自分の実力を会社の看板の実力とオーバーラップしてやってきた人というのは、活躍しているときにはいろいろなお誘いがあったり、いろいろな人が寄ってきますよね。でも、会社の看板がなくなると急に人が寄ってこなくなります。そうすると、自分の実力だと思っていたものが実は「会社」という看板の力だったんだということを思い知らされる。しかも、自分は会社一筋に生きてきたからそこにしかアイデンティティがない。それを外された時の動揺というのは想像するに難くありません。

大阪のおばちゃんではないですが、強烈なアイデンティティを持っている人がいると、それにくっつくことでかろうじて自分のアイデンティティが壊れないようにさせることを「濡れ落ち葉」という感じで言いますが、私が見るところ、濡れ落ち葉の人というのは一筋で頑張ってきた人、そして会社である程度の地位に登りつめた人に多いなと思います。だから、本当は弱い。いろいろなことができなくなってきているんだということをきちっと知っておくということ。じゃあ何をすべきか。生きるということにおいて自分たちのしんどさを自分たちでマネージする。生きる力を失っているという

ことにまず気づくことです。それに気づかないとガクンときます。まずは気づくことで回りまわって本当の力になっていくと思います。

●協同組合と組織づくり、教育の意味

組織論はすごく大事だと思います。旧態依然とした日本の政治、あるいは戦後の労働組合がやってきたような組織論、コミュニケーションは一度解体する必要があると思います。人々のアソシエーションを、専門家に委託するからみんな無能力になってきたんです。大事なことは、例えば医療でも医師とは違う形で自分の身体の病いをマネージするような、そういう知恵をもっていなくてはなりません。相互にケアしあう力をもっていかななくてはなりません。そういう力が求められています。市民一人一人が専門家に委託するのではなく、自分自身が基礎体力をつけるということです。

よく言うのですが、日本の小学校で、ものごとをきちんと論理的に言う力。それと人と出会った時に相手がどういうケアを必要としている人なのかということがパッと分かって、それにふさわしい対応ができるような能力。これさえきちり教えれば何とかなるのではないのでしょうか。その時に議員さんに陳情して全部をお願いするとか、あるいは組合の幹部の人に戦略的に知識を与えてもらってそれに忠実に動くという旧来の組織論をやっていると、我々は行動する者として無能力になっていきます。同じことを繰り返すわけです。自分たちで決め自分たちで最後まで担う。そういうあたら

しいコミュニケーションの仕方、新しい組織の作り方というものを工夫する必要があると思います。そこが組織づくりの根幹だと思います。

コミュニケーションで大切なのは、お互いがよく分かっている、いろいろなものを共有していることです。政治はそういうことで動かない、なあなあでしかやってきませんでした。私たちに大切なのは、家族や地域が壊れた時、壊れたものを再現することはできませんが、「コミュニティ」という名のもとみんながもう一度一種の協同性、まさに協同を作り出そうとすることです。

その時に必要なコミュニケーションは、今や生まれた時からお互いを知っているような地域においてではないんです。隣もその隣の人も家に入ってしまったって知らない。だからコミュニティというのは自然発生的に出来てきたものではなく、意識的につくりたいといけないものなんです。そうすると「言わなくても分かる」というようなコミュニケーションでは駄目です。逆にお互いの文化的背景も出生のプロセスも違う人たちが、お互い見知っていない人たちであっても、それでも同じ場所で生活をし苦労していく。その中でどういう共存の仕方がいいのかということをしちっと話し合える、そういうコミュニケーションです。お互いが全然顔見知りでないという前提で、それでもお互いを尊重しながら一緒に社会や地域を運営していきましょうという、「きちっと話す、きちっと聞く」というコミュニケーションです。そういう意味でみんなが無力にならない。委託しない。自分で考える。そのような体力をつけることが必要だ

と思います。

鷺田清一（わしだ・きよかず）さん プロフィール

大阪大学大学院文学研究科教授（臨床哲学）
1949年京都府生まれ

哲学をベースに身体、他者、所有、規範、制度などの問題を論じてきたが、近年は〈顔〉論、モード論の独自の研究領域を開くとともに、現在は哲学の発想を社会が抱え込んだ諸問題へとつないでいく臨床哲学のプロジェクトと取り組んでいる。

おもな著作としては

- 『モードの迷宮』（ちくま学芸文庫）
- 『現象学の視線』（講談社学術文庫）
- 『じぶん・この不思議な存在』（講談社現代新書）
- 『ちぐはぐな身体』（ちくまプリマ・ブックス）
- 『だれのための仕事』（岩波書店）
- 『「聴く」ことの力』（TBS プリタニカ）
- 『めいわくかけて、ありがとう』（講談社、近刊）など。

現代思想の冒険者たち（講談社、全31巻 編集委員。
サントリー学芸賞受賞（1989年）

講演の記録

社会連帯委員会東京 設立記念集会

日付：2005年7月31日（日）

会場：自治労第1会館

主催：社会連帯委員会・東京ノワーカーズ
コープ東京事業本部